フラナリー・オコナーの “The Geranium” における “manners” と南部家父長の構築[1)]

久　保　尚　美

1925 年にアメリカ南部のジョージア州に生まれ、1964 年に 39 歳という若さで亡くなった作家 Flannery O’Connor が作品の執筆をおこなった 20 世紀中葉は、アメリカで公民権運動が推し進められた時期に重なる[2)]。人種をめぐる社会情勢が大きく変化するなか、アメリカ南部を舞台とするオコナーの作品世界において、人種間の関係はどのように描き出されているのか[3)]。それを考えるにあたり本稿では、オコナーが小説を書く際に重要視した “manners” という側面とのかかわりを、短編 “The Geranium” (1946) を中心に考察したい。

1. オコナーと “manners”

敬虔なカトリック教徒であった作家オコナーは、講演 “The Fiction Writer

---

1) この論考は、日本フラナリー・オコナー協会第 6 回大会（2019 年 3 月 16 日、明治学院大学白金キャパス）で報告したものの一部に加筆・修正をほどこしたものである。

2) オコナーと公民権運動のかかわりについては、Whitt の論考に詳しい。

3) オコナーの作品における人種の表象、またオコナー自身の人種意識については、これまでの批評においても着目されてきた。Evans は *The Critical Reception of Flannery O’Connor, 1952–2017* (2018) において、オコナーと人種に関してなされた 1960 年代から 2010 年代までの議論を整理している（188–211）。また O’Donnell の *Radical Ambivalence: Race in Flannery O’Connor* (2020) には、オコナーのこれまで未発表の人種差別的記述を含む手紙が収録されている。オドネルはオコナーの差別的偏見については認めたうえで、いかに作品をとらえ直すことができるかということに焦点をあてている。

and His Country” のなかで自身について、“I see from the standpoint of Christian orthodoxy”（*MM* 32）[4] としたうえで、その立場をこう説明する。“for me the meaning of life is centered in our Redemption by Christ and what I see in the world I see in its relation to that”（32）．このように信仰する者の立場で世界を見るオコナーが、作家として作品に示そうとするのは、「キリストによる贖いとのかかわり」のあらわれである “mystery” だというが、それを描き出すにあたり重要になるのが “manners” だという。それはなぜか。たとえば講演 “The Teaching of Literature” では次のように述べている。“It is the business of fiction to embody mystery through manners and mystery is a great embarrassment to the modern mind”（124）．つまりオコナーは、現代人を当惑させるような “mystery” という神秘の領域にかかわるできごとを、日常生活に見られる “manners” を通して読者に実感を持って示そうとしているのだ。オコナーが、作家にとって “manners” がいかに大切なものだと考えているかは、次の言葉からも明らかだ。

> Manners are of such great consequence to the novelist that any kind will do. Bad manners are better than no manners at all, and because we are losing our customary manners, we are probably overly conscious of them; this seems to be a condition that produces writers. (29)

“manners” とは、人々の振る舞い方一般を指しうる幅広い言葉であろうが、オコナーのいう “manners” とはどのようなものだろうか。講演 “Writing Short Stories” でオコナーは、小説における “manners” と “mystery” につ

4） 引用部分の訳文に関して、オコナーの作品で既訳のあるものについては下記を参照し、適宜改訳した。参照した訳書は以下の通り。『秘義と習俗：フラナリー・オコナー全エッセイ集』上杉明訳；『善人はなかなかいない：フラナリー・オコナー作品集』横山貞子訳；『オコナー短編集』須山静夫訳；『賢い血』須山静夫訳。またページ番号の脇の *MM*, *CS* はそれぞれ、以下の書名の略称である。*MM*: *Mystery and Manners*; *CS*: *The Complete Stories*.

いて、次のように述べている。

> There are two qualities that make fiction. One is the sense of mystery and the other is the sense of manners. You get the manners from the texture of existence that surrounds you. The great advantage of being a Southern writer is that we don't have to go anywhere to look for manners; bad or good, we've got them in abundance. We in the South live in a society that is rich in contradiction, rich in irony, rich in contrast, and particularly rich in its speech. (103)

オコナーはここで、小説を構成する "mystery" と "manners" という二つの要素のうちの "manners" について、「自分を取り巻く存在の質感」から得られるものだとし、その「質感」は南部においては「矛盾」、「アイロニー」、「対照」、そしてとりわけ「会話」において濃密にあらわれており、そのことが作家にとっての利点であると述べている。このような発言からは、オコナーが小説に描き出そうとした "manners" の範疇もやはり広範にわたり、南部の文化や人々の振る舞いや人間関係に織りこまれた機微全般を含んでいるといえるであろう。

アメリカ南部における "manners" について、アメリカ文化史研究者 John F. Kasson は *Manners and Southern History*（2007）に寄せた論考 "Taking Manners Seriously" において、"The notion that Southerners possessed a special—and superior—set of manners is both venerable and enduring"（152）と述べ、その歴史的変遷を概観している。キャソンによると、南部には特有の "manners" があるという考えのルーツは、18 世紀の入植者たちのあいだで、どの入植地がもっとも洗練された "manners" を有しているかといった競い合いがあったことにもたどることができるという。そして、それがのちに南部人のあいだで自らの地域の独自性だと考えられるようになり、その後、William R. Taylor の *Cavalier and Yankee: The Old South*

and American National Character（1961）にも示されたように、南部人は北部人よりも “manners” において洗練されているという認識が、南部の人々だけではなく北部の人々にも共有されるに至る。またその認識は 1930 年代に南部の農本主義者が、急速に推し進められる産業化や近代化、そして進歩主義的な北部に対抗するための足場ともなったとされる（Kasson 152–153）。このような文脈において南部の “manners” として言及される項目にはたとえば、「紳士と淑女」、「騎士道精神」、「ホスピタリティ」、「ノブレス・オブリージュ」などが挙げられるが、南北戦争後のアメリカ南部に不文律として存在した「人種間のマナー」や「人種間のエチケット」もまた、南部の “manners” において重要な位置を占めている。それは南北戦争後の人種隔離政策下において、相手に対して用いる呼称から往来でのすれ違い方など、生活のあらゆる場面で黒人の側が服従を示すことにより、白人の側の優位性を保ってきた “manners” であった（Ownby ix–x , Wilson 97–102）。

では、作品に南部における “manners” を描き出そうとしたオコナーは、人種のあいだの “manners” をどのようにとらえていたのだろうか。公民権運動などに関して公に言及することの少なかったオコナーだが、彼女が死去する前年、公民権運動が高揚する最中の 1963 年に雑誌 *Jubilee* に掲載されたインタビューで、南部の社会状況について次のように語っている。

> It requires considerable grace for two races to live together, particularly when the population is divided about 50–50 between them and when they have our particular history. It can’t be done without a code of manners based on mutual charity. I remember a sentence from an essay of Marshall McLuhan’s. I forget the exact words, but the gist of it was, as I recollect it, that after the Civil War, formality became a condition of survival. (233)

ここでオコナーは人種間の “manners” を黒人と白人双方の “mutual charity” にもとづくものだと述べている。たしかに人種間の “manners” は、黒人と白人がカラーラインを越えて交わるときに双方に期待される振る舞いではあったが、黒人の側が適切に従っていないとされた場合には、私刑による死をも含むさまざまなかたちで罰せられる可能性を持つ、明らかに不平等なものであった（Ritterhouse 20）。したがって、そのような人種間の “manners” が「双方の寛容さ」にもとづくものだとするオコナーの見解は、先行研究において Julie Armstrong が “her white privilege did allow her to ignore race in ways that African Americans could not”（82）と批判したように、自らの白人としての優位性に無自覚なものだといえるだろう[5)]。

だがここで、オコナーがそれに続いて述べている内容にも着目したい。以下の箇所ではオコナーが、黒人たちの示す “manners” に演技的要素を見いだしていたことが示される。

> The uneducated Southern Negro is not the clown he’s made out to be. He’s a man of very elaborate manners and great formality, which he uses superbly for his own protection and to insure his own privacy. All this may not be ideal, but the Southerner has enough sense not to ask for the ideal but only for the possible, the workable. The South has survived in the past because its manners, however lopsided or inadequate they may have been, provided enough social discipline to hold us together and give us an identity. Now those old manners are obsolete, but the new manners will have to be based on what was best in the old ones—in their real basis of charity and necessity. (*MM* 234)

オコナーはここで、「南部の黒人はいわれているような道化ではない」とい

5） Armstrong, 77–83. Larsen, 88.

う。そうではなく、「自らを守り、自らのプライバシーに踏み込まれないため」に「複雑なマナーと様式を見事なまでに使いこなしている」のだという[6)]。つまり、人種隔離政策下における異なる人種間の対人関係において、黒人たちが「劣位であるさまを示す」のは、黒人が「生まれつき劣っている」ことのあらわれだ（Ritterhouse, “Etiquette” 52）とするような、いわゆる本質主義的な見解を、オコナーは主張しない。南部の黒人たちは “manners” を通して「道化」を演じているのだ、と述べているのだ。

Grace Elizabeth Hale は *Making Whiteness: The Culture of Segregation in the South, 1890–1940*（1999）において、1890 年から 1940 年のあいだに、人種隔離の文化が南部全体を “a theater of racial difference”（284）に変えたという。ヘイルは、この時代に南部の白人が直面した脅威として、中産階級層に属する黒人が増えることにより黒人と階級との結びつきが緩んだこと、そして都市的な大衆社会への移行が進むなかで、それまでのような地域における個人間に根ざしたヒエラルキーが脅かされていったことを指摘する。そしてその脅威が、人種間の差異の儀式的実践を、20 世紀の白人至上主義の維持に不可欠なものとしたのだという。それが儀式的にならざるを得なかった理由を、ヘイルは次のように述べる。“Since southern black inferiority and white supremacy could not, despite whites’ desires, be assumed, southern whites created a modern social order in which this difference would instead be continually performed. For whites, this performance, in turn, made reality conform to the script”（284）. つまり「南部黒人の劣等性」も「白人の優越性」も所与のものではなく、それを演出するために

6） 南部の詩人 William Alexander Percy は、自伝的著書 *Lanterns on the Levee: Recollections of a Planter’s Son*（1941）において、南部における “manners” に関して “it is incredible, I insist, that two such dissimilar races should live side by side with so little friction, in such comparative peace and amity. This result is due solely to good manners. The Southern Negro has the most beautiful manners in the world, and the Southern white, learning from him, I suspect, is a close second”（286）と述べているが、このように黒人の “manners” を評価する見解は、オコナーの見解と重なる。

白人が書いた「スクリプト」を実践することによって生み出されていたということである。この「スクリプト」こそが、南部における人種間の“manners”だといえるだろう。オコナーの見解はこのような構築主義的な考察につながるものであろう。そして先の引用箇所でオコナーは、そうした“manners”が「不均衡」で「不適切」であることを認める（*MM* 234）。それゆえ現状は「理想的」ではなくただ「実際的」でしかなく、今では「時代遅れ」のものであると（*MM* 234）。だが、これまではそうした“manners”こそが「南部を一つにまとめ、私たちにアイデンティティを与えていた」というように、オコナーはその有用性を強く意識している（*MM* 234）。したがって南部の“manners”を作品に描くことはオコナーにとって、南部の成り立ちを、歪みも含めて見つめ直すことにほかならない。

Toni Morrison は「他者化（“Othering”）」のプロセスを考察した *The Origin of Others*（2017）のなかで、黒人を劣位に位置づける論拠の一つとされてきた科学的人種主義について、その目的の一つを「よそ者」を定義することによって自分自身を定義することだと指摘する（6）。そしてそのうえで、文学が「他者化」を扱うことは、「他者化」に用いるすべをその作品が肯定しているか糾弾しているかにかかわらず、「自己」が定義づけられる仕組みを明示することにおいて極めて「啓示的」であると、次のように述べている。“Literature is especially and obviously revelatory in exposing / contemplating the definition of self whether it condemns or supports the means by which it is acquired”（6）. そして同書のなかでオコナーの“The Artificial Nigger”（1955）を取り上げて、その短編がいかに「一人の他者」を生み出す過程を注意深く描いているかを論じている（19–24）。モリスンは作家オコナーについては、「他者」の構築に対する洞察力が「鋭く正確である」として、次のように評価している。“Flannery O’Connor exhibits with honesty and profound perception her understanding of the stranger, the outcast, the Other. Underneath the comedy, often noted by her reviewers, lies a quick and accurate reading of construction of the stranger and its

benefits” (19). モリソンが指摘するように、オコナーは作品において、南部の人々がどのように自己を形成するか、つまりは誰をどのように「他者化」するのかを忌憚なく描き出す。

だがそれだけではない。オコナーが繰り返し焦点をあてるのは「他者化」に綻びが生じる瞬間である。オコナーは、南部の “manners” を凝視し作品に描き出すなかで、それが公民権運動の高まりのなかで強く否定され「時代遅れ」になるさまも含めて、作品に描き出すことになった。したがってオコナーが作品に繰り返し描きだすのは、“manners” によって構築された南部人の、とりわけ南部の白人のアイデンティティの成り立ちであるとともに、それによって立っていたはずの “manners” が機能しなくなる瞬間であり、その衝撃であるだろう。

2. 南部家父長の構築——「ゼラニウム（“The Geranium,” 1946）」

では実際の作品においては、人種をめぐる “manners” を、オコナーはどのように描いているだろうか。初期の作品「ゼラニウム」は、南部白人男性の居場所をめぐる物語である。南部の田舎町から娘を頼ってニューヨークに出てきた主人公 Old Dudley は、北部になじむことができず南部への郷愁をつのらせる。ダッドリーの居心地の悪さを通してこの短編小説で描き出されるのは、南部家父長の構築性である。

南部の田舎町から出てきた主人公ダッドリーは、娘夫婦と孫の住むニューヨークのアパートに居候している。もともと大都市には「自分の居場所（“room for him”）」（4）があるはずだ、という思いを抱いてニューヨークに出てきた彼であったが、口もきいてくれない孫と同じ部屋に寝泊まりし、娘からも邪険に扱われるアパート暮らしは、「あまりに窮屈（“too tight”）」で「どこへ行っても誰かがいる（“no place to be where there wasn’t somebody else”）」（7）と感じられる。そのようなダッドリーの居場所のなさは、作品の冒頭で、彼が朝から晩まで座り続けるために「次第に彼の体の形になってきた椅子（“the chair he was gradually molding to his own shape”）」

(3) から、窓の外を眺め続ける姿にも象徴的に描かれている。彼が眺めるのは、向かいの建物の窓辺に置かれる、彼にとって南部を思い出させるゼラニウムの鉢植えである。この作品のタイトルでもあるゼラニウムは、ダッドリーにとっては、自己を投影する対象でもある。Val Larsen が指摘するように、ダッドリーが眺める窓は鏡の役割をし、そこに見えるゼラニウムの鉢植えは、生まれ故郷から「引き抜かれて（“uprooted”）」、狭苦しいアパートに「押し込められた（“potted in”）」彼自身の姿である（Larsen 89）。そして、その鉢植えが日射しにさらされ、風が吹けば落ちそうなところに置かれている様子を見ているうちに、彼の「喉がつまってくるように感じられ（“Old Dudley felt his throat knotting up”）」（*CS* 3）るのは、彼の身の置き所のなさが、喉のスペースのなさとしてあらわれるものだ。彼にとってゼラニウム、すなわち彼自身は「そんなところに置かれるべきではない（“It shouldn’t have been there”）」ものであり、見た目もよい南部のゼラニウムこそが「ほんもののゼラニウム（“Ours are sho nuff geraniums”）」（3）だという。

では、ダッドリーの南部における居場所はどのようなものであったのだろうか。南部における自身について彼は、「一家の男であり、そのような男がなすべきことをしていた（“He was the man in the house and he did the things a man in the house supposed to do”）」（5）と、いわゆる一家の主人（あるじ）であり「家父長」であったと回想している。だがそれは、旧南部のプランテーションにおいて広大な土地に立派な豪邸を持ち、妻子、そして黒人奴隷を従えることで、人種とジェンダーによって構成される旧南部社会のヒエラルキーの頂点に君臨した家父長像とはかけ離れている。下宿屋の部屋を借り、年金と半端仕事に頼って暮らしていたダッドリーの「一家の男」としての役目は、おなじ下宿に住む老いた白人女性たちの口げんかの仲裁をすることや、下宿で下働きをする黒人男性の助けでなんとか釣った魚を、自らの手柄として持ち帰ることぐらいであった。それでも二階に自分が住み、一階に守るべき老婦人たちがおり、地下に自分に仕える黒人夫婦が暮

らす南部での生活は、彼にとっては自分が「家父長」である “a microcosmic Old South”（Larsen 90）であった。

だが故郷に思いを馳せるダッドリーの姿を通してこの短編が明らかにするのは、彼に「家父長」としての居場所を与えていた南部家父長制がどのように構築されているかであり、彼自身がその仕組みにいかに無頓着でいられたかということである。ダッドリーが自分自身を誇らしく思い返す一方で、彼の回想する一連のエピソードが図らずも示すのは、Doreen Fowler の指摘にもあるように、下宿の黒人 Rabie や Lutisha こそが、彼を「家父長」たらしめていたのだということである（Fowler 31）。前述の釣りのエピソードを見てみよう。ダッドリーとレイビーは毎週水曜日に釣りに行ったが、川の様子を上流から下流まで熟知し、魚のいるポイントを探ってはそこにダッドリーを連れて行き、一日中彼の釣りに付き合うというように、すべてのお膳立てをするのはレイビーであった（4–5）。そして、ダッドリーはそのようにして釣った魚を下宿へ持ち帰るのが好きだった。そうするたびに老婦人たちが「こんなに魚をとるには、やっぱり男じゃないとね（“It took a man to get those fish, the old girls at the boarding house always said”）」（5）と言ってくれるからだ。儀式のように繰り返されたであろうこうしたやりとりの積み重ねこそが、ダッドリーを「家父長」とし、老婦人たちを「家父長」に守られる女性たちとするような、その場の “manners” となっていたのであろうが、そうした儀式を裏で支えることになっていたのはレイビーやルティーシャであった。

そしてレイビーは川を熟知しているだけではない。レイビーの優れた様子は、作品の後半で回想される狩りの場面では、ダッドリーとの対比を通してさらに明らかになる。まずレイビーが「俊敏（“light-footed” “Fast too”）」であるのに対してダッドリーは「鈍い（“Dudley had always been slow on his feet”）」ことが思い出される（11）。そして、山中のすべりやすい松の落ち葉の上を歩くふたりの対照的な姿は、次のように描かれる。

> [Old Dudley] had to be careful of the pine needles. They covered the ground and made it slick. Rabie shifted his weight from side to side, lifting and setting his feet on the waxen needles with unconscious care. He looked straight ahead and moved forward swiftly. Old Dudley kept one eye ahead and one on the ground. It would slope and he would be sliding forward dangerously, or in pulling himself up an incline, he would slide it back down." (11)

この描写では、「無意識の用心深さ」を発揮し、左右に重心を移しながら素早く前進するレイビーの安定感と、上り坂でも下り坂でも、気をつけていても転びそうなダッドリーの不安定さが強調される。実際、この後に続く場面では、レイビーの助言を無視したダッドリーはすべって穴のなかに転がり落ち、獲物を逃し、レイビーに助けを求めている（11–12）。このように、この作品におけるダッドリーとレイビーの能力差は、南部家父長制を支える白人優位主義における、有能な白人が劣等な黒人を保護（パトロナイズ）するという図式をくつがえすものであり、語り手のシニカルなトーンもそれを強調している。しかし南部において、ダッドリー自身にこうした構図が意識されることはまずなかった。なぜなら、ちょうどすべりやすい松の落ち葉の上でも「無意識の用心深さ」で俊敏な動きを保持したように、レイビーはさまざまな場面で入念な "manners" を駆使し、ダッドリーからすれば至って良好と思えるように関係を支えていたからだ[7)]。いつでもダッドリーを「ボス（"Boss"）」（5,11）と呼び、仕事の途中でもダッドリーのやりかけてい

7） たとえば W. J. Cash は *The Mind of the South*（1941）のなかで、南部の黒人の演じる能力とそれによってあらゆる疑問から守られる白人の関係を次のように述べている。"And what is worth observing also is that the Negro, with his quick, intuitive understanding of what is required of him, and his remarkable talents as a mime, caught them up and bodied them forth so convincingly that his masters were insulated against all question as to their reality—were enabled to believe in them as honestly as they believed in so many other doubtful things" (84).

る作業を手伝い、ダッドリーの知っていることをなんでも何度でもよろこんで聞き、ダッドリーが銃の手入れをするたびに、銃を組み立てる様子を見て驚嘆してくれていたのは、レイビーだった（5–6）。

ダッドリーとレイビーのあいだに見られるこの支配と恭順の関係性は、人種隔離政策下の南部におけるいわゆる人種隔離法のように、法的に求められたものではない。あたかも自発的に南部の “manners” や “etiquettes” に従っているかにように白人の目にはうつる、黒人たちの「礼儀正しさ」は、実のところ白人による日常的な威嚇――究極的には生死にもかかわりうるという恐れ――によって強制されたものである（Wilson 101）。たとえば、レイビーがオポッサム狩りは好きではないことを知りながらも、ダッドリーが彼を同行させようと促す場面がある。今夜は所用があるのだといって気の進まない様子を見せるレイビーに対し、ダッドリーは「おまえ、今夜はどこの鶏を盗むつもりなんだ（“Whose chickens you gonna steal tonight?”）」（*CS* 5）と言い、にやっと笑う。ここでダッドリーがおこなっているのは、冗談めかしてはいるが、もし誘いを断れば、おまえを「窃盗犯」とすることができるのだぞ、という脅しである。当時の南部において、白人にかけられた嫌疑を黒人の側が晴らすことなど望むべくもない。レイビーは「今晩はオポッサム狩りに行きますよ（“I reckon I be huntin’ ‘possum tonight”）」（5）とため息をつき、実際には一度も仕留めたことのないオポッサム狩りに同行するしかない。

こうして南部では老婦人たちから「男」と呼ばれ、レイビーから「ボス」と呼ばれることで、ジェンダーと人種のヒエラルキーの頂点に立つ「家父長」を演じることができていたダッドリーは、利根川真紀が指摘するように、「北部に移動するとともに、周囲から老人、子ども、非男性扱いされることにより、深刻なアイデンティティの危機に見舞われる」（利根川 27）ことになる。娘は父親を手のかかる老人として扱い、子どもにさせるようなお使いを頼み、アパートの階段ですれ違う婦人は彼に挨拶もしない。「一家の男」としての役割を失ったダッドリーが、ニューヨークの暮らしで居

場所を見いだせないときに「もしあいつにニューヨークを案内してやれたら、ここがこんなにも大きいと感じないでいられたのに。街に出るたびに押しつぶされるような気持ちにならずにすんだのに（“If he could have showed it to Rabie, it wouldn’t have been so big—he wouldn’t have felt pressed down every time he went out in it”）」（*CS* 6）と、レイビーを懐かしく思い出すのは、いかにダッドリーの「家父長」というアイデンティティの構築が、レイビーの如才のない “manners” に頼ったものであったかをあらわしている。下宿で下働きをする黒人たちが、ダッドリーの「南部」を支えていたことは、作品冒頭のゼラニウムの鉢植えの描写にも巧みにあらわされている。故郷のものと比べて貧弱に見える鉢植えを眺めて、ダッドリーは考える。「ルティーシャなら、あのゼラニウムを鉢から土に植えかえて、数週間で見られるものにするだろう（“Lutisha could have taken that geranium and stuck it in the ground and had something worth looking at in a few weeks”）」（3）。そもそも南部でダッドリーを「見られるもの」にしていたのはルティーシャであり、レイビーであったのだ。

それゆえ、北部において南部の “manners” が通用しない様子がもっとも顕著になるのは、人種をめぐるエピソードにおいてである。まず南部生まれの娘との齟齬が、アパートの隣室に黒人が越してきたときにあらわれる。娘一家との居心地の悪い生活を送るなか、アパートの隣室によい身なりをした黒人が出入りしているのを見かけたダッドリーは、その男がその部屋に雇われた使用人だと思い込む。そして、娘に向かって意気揚々と「ちょっと行って、あいつが休みの日を聞いてみるか。釣り好きになるよう、説得できるかもしれない（“I think I’ll go over and see what day he gets off. Maybe I can convince him he likes to fish”）」（8）と話す。その黒人をレイビーのように従わせようというのだ。だが娘は父親を引き留め、その男は使用人などではなく、隣室に引っ越してきたのに違いなく、黒人とかかわって面倒を起こさないようにと諌める。するとダッドリーは、「正しく育てられた自分の娘（“his own daughter that was raised proper”）」（9）が、自分

と同じ “manners” で黒人を見ていないことに驚き憤る。「おまえを、そんなふうに育てたおぼえはないぞ！（“You ain’t been raised that way!”）」（9）と大声でどなりつけ、「おまえは、わしらと対等だと思っているような黒ん坊と隣りあって暮らすように、育てられてはおらんはずだ。それに、わしがそういうやつとかかわろうとしてると思うのか！（中略）おまえは狂ってる！（“You ain’t been raised to live tight with niggers that think they’re just as good as you, and you think I’do go messin’ around with one er that kind! . . . you’re crazy”）」（9）と叱責するが、娘は取り合わない。

そして隣室に越してきた北部の黒人との直接のやりとりは、南部でダッドリーを支えていた人種間の “manners” が北部には存在しないことを知らしめる。娘に頼まれた階下への使いから戻る途中の階段で、ダッドリーはレイビーとの狩りの思い出に浸り、気づかぬうちに「バン！」と声に出しながら銃を撃つ真似をしている。そこに通りかかるのが隣室の黒人だが、彼の振る舞いはレイビーと異なる。笑いをこらえながらもいたわるように「何を撃っているんですか」とダッドリーに話しかけ、彼を「おじいさん（“old-timer”）」と呼ぶのだ（12）。ダッドリーがその声に「黒ん坊の笑いと、白人の嘲笑（“a voice that sounded like a nigger’s laugh and a white man’s sneer”）」（12）を聞きとることは、この北部の黒人が、彼がこれまで認識してきた「黒ん坊」とは異なることを意味し、この人物がなにものなのかアイデンティファイできないでいることのあらわれである。黒人であって「黒ん坊」の “manners” に従って振る舞わない人物との遭遇は、ダッドリーが「家父長」を演じることを可能にしてきた舞台を支える基盤が北部にはないこと、彼の居場所がないことを突きつける。ゆえに、この場でダッドリーが自分が「おもちゃのピストルを持った子どものような気がした（“felt like a child with a pop-pistol”）」り、「膝から下がなくなったように感じて（“Right below his knees felt hollow”）」階段を三段滑り落ちる姿は象徴的である（12）。南部において「最上階」の部屋に住んでいることが、ダッドリーがその場のヒエラルキーの最上位に位置づけられていたこ

とを象徴していたように、北部の場面においては「階段」での位置が、彼の北部における自らの位置づけと連動する。

では「家父長」としての地位を揺るがされたダッドリーと北部の黒人との関係は、どのように描かれているだろうか。階段を滑り落ちたダッドリーに親切に手を差しのべた黒人は、「自分もどうせ上るのだから、手伝いますよ（“I'm going up anyway,” . . . “I'll help you”）」（12）と言って、一段ずつ先に上ってはダッドリーを待ち、ダッドリーの腕をとって部屋の前まで一緒に歩いていく。しかし「ボス」としてではなく「老人」として彼をいたわる北部の黒人の振る舞いを、ダッドリーは受け入れることができない。ダッドリーがニューヨーク出身ではないとわかった黒人は、元気づけるように彼の背中をポンとたたいて自分の部屋に入っていくが、そうした慰めも彼にとっては許しがたい侮辱となり、さらに彼を追い詰めることになる。居場所を見いだせないダッドリーの狼狽は、体の変調として次のように描かれる。

> The pain in his throat was all over his face now, leaking out his eyes.… His throat was going to pop on account of a nigger—a damn nigger that patted him on the back and called him “old-timer.” Him that knew such as that couldn't be. Him that had come from a good place. A good place. A place where such as that couldn't be. His eyes felt strange in their sockets. They were swelling in them and in a minute there wouldn't be any room left for them there. He was trapped in this place where niggers could call you “old-timer.” He wouldn't be trapped. (13)

北部におけるダッドリーの居心地の悪さは、これ以前の箇所においても喉が詰まる感覚として繰り返しあらわれていたが、階段での黒人とのやりとりは、彼の喉から顔全体へひろがり、眼窩の “room” さえも奪い、自分自身の体においてさえ、居場所のない彼の窮状が示される。そのような彼が

唯一の頼りにするのは「ちゃんとした場所（“a good place”）」であるはずの南部の存在である。だがこの短編が示してきたのは、彼には “good” に見えていた南部での生活が、実際には人種隔離政策下で白人が黒人に強いてきた “manners” の積み重ねによって辛うじて成り立っていた芝居であり、そこで「家父長」を演じていた彼こそが、じつは自分が振りかざしている権威が、レイビーやルティーシャが「黒んぼ（ニガー）」を演じることによってのみ構築される南部白人性であることに気づかない、まるで道化のような存在だったということだ。

作品の終盤、北部の黒人との遭遇後に部屋に戻ったダッドリーは、自らを投影していたゼラニウムの鉢植えが、向かいの部屋の窓辺から落下したことを知る（14）。それを拾い上げて、一日中眺めていたいと思いながらも、彼はそれを拾いに行くことができない。落ちた鉢植えを拾い上げ、「階段」を上るためには、先ほど彼を「家父長」としてではなく「老人」として扱い、彼に自分が「子ども」であるかのように感じさせた黒人と再び対峙しなくてはならないことを恐れているのだ（14）。だがダッドリーはここで、その黒人ひとりにおびえているだけではない。自分が知る「黒んぼ（ニガー）」としての “manners” に従わない黒人という存在そのものが、彼をおびえさせるのである。「黒んぼたち（ニガーズ）が、一段ごとにいるのだ（中略）笑わないように口をへの字にまげて。下りていって、黒んぼたち（ニガーズ）に背中をたたかれるわけにはいかない（“There’d be niggers . . . in every step, pulling down their mouths so as not to laugh.… He wouldn’t go down and have niggers pattin’ him on the back”）」（14）。北部の黒人が階段で示したような、南部の “manners” を介さない関係性を、ダッドリーは受け入れることはできない。彼にできることは、「いちばん下の路地のところで、根を空気にさらしている（“It was at the bottom of the allay with its roots in the air”）」（14）鉢植えを、なすすべもなく見つめることである。

オコナーはこの短編において、南部家父長制の構築性を描き出すなかで、黒人が「黒んぼ（ニガー）」ではないことが、南部の白人にとってどれほどの衝撃を

与えるのかという問題に行きあたることになったのではないか。デビュー作「ゼラニウム」の発表後もオコナーはこのモチーフに手を入れ続け、まず 1954 年に脱稿し死後に出版された “An Exile in the East”（1978）として改訂し、さらにその後、死の直前まで推敲されたものは “Judgement Day”（1965）として短編集に収録された。作家としてのキャリアの始めから終わりまでこのモチーフに取り組み続けたことは、オコナーにとって人種の問題がいかに閑却を許さないものであり、かつ容易には描ききれないものであったかということを示しているだろう。オコナーが James Baldwin との対面の可能性を退けたことはよく知られているが[8)]、オコナーが作品を執筆するなかで探り続けた南部白人にとっての人種の問題は、ボールドウィンが 1963 年のインタビューにおいて提起している問いに答えようとするものになっているように思われる。

> What white people have to do is try to find out in their own hearts why it was necessary to have a “nigger” in the first place, because I am not a nigger, I’m a man. But if you think I’m a nigger, it means you need him. The question that you’ve got to ask yourself, the white population of this country has got to ask itself, North and South because it’s one country and for a Negro there is no difference between the North and the South … if I’m not the nigger here and you invented him, you the white people invented him, then you’ve got to find out why. (108–109)

8） オコナーは 1959 年に友人 Maryat Lee に向けた手紙で、ボールドウィンをジョージア州の自宅でもてなす可能性について次のように述べている。この手紙は彼女の人種意識を示す証拠として、しばしば引き合いに出される。“No I can’t see James Baldwin in Georgia. It would cause the greatest trouble and disturbance and disunion. In New York it would be nice to meet him; here it would not. I observe the traditions of the society I feed on—it’s only fair. Might as well expect a mule to fly as me to see James Baldwin in Georgia” (*Habit and Being* 329).

「なぜあなたはニガーを必要とするのか」というボールドウィンの問いに答えようとすることは、モリスンが問題にする「他者化」のプロセスを吟味することでもあるだろう。公民権運動が高まるなか、“The Artificial Nigger” においては白人性が構築される瞬間を描き出し、“Judgement Day” においてはパフォーマティヴィティとしての人種のありようを描くなど、南部における人種をめぐるオコナーの思索は続いた。「ゼラニウム」以降の作品については、稿を改めて論じたい。

引用文献

Armstrong, Julie. “Blinded by Whiteness: Revisiting Flannery O’Connor and Race.” *The Flannery O’Connor Review*, vol.1, 2001–2002, pp. 77–87.

Baldwin, James. *I Am Not Your Negro*. Ed. Raoul Peck. Vintage, 2017.

Cash, W. J. *The Mind of the South*. 1941. Vintage, 1991.

Evans, Robert C. *The Critical Reception of Flannery O’Connor, 1952–2017*. Camden House, 2018.

Fowler, Doreen. “Writing and Rewriting Race: Flannery O’Connor’s ‘The Geranium’ and ‘Judgement Day.’” *The Flannery O’Connor Review*, vol. 2, 2003–2004, pp. 31–39.

Hale, Grace Elizabeth. *Making Whiteness: The Culture of Segregation in the South, 1890–1940*. Vintage, 1999.

Kasson, John F. “Taking Manners Seriously.” *Manners and Southern History*, edited by Ted Ownby. University Press of Mississippi, 2007, pp. 152–162.

Larsen, Val. “Manor House and Tenement: Failed Communities South and North in Flannery O’Connor’s ‘The Geranium.’” *The Flannery O’Connor Bulletin*, vol. 20, 1991, pp. 88–103.

Morrison, Toni. *The Origin of Others*. Harvard UP, 2017.

O’Connor, Flannery. *The Complete Stories of Flannery O’Connor*. 1971. Farrar, 1995.（フラナリー・オコナー『オコナー短編集』須山静夫訳、新潮文庫、1974年、フラナリー・オコナー『フラナリー・オコナー全短篇 上』横山貞子訳、筑摩書房、2003年）

———. *Mystery and Manners: Occasional Prose*, edited by Sally Fitzgerald and Robert Fitzgerald. Farrar, 1969.（フラナリー・オコナー『秘儀と習俗：フラナリー・オコナー全エッセイ集』上杉明訳、春秋社、1999年）

———. *The Habit of Being: Letters of Flannery O’Connor*, edited by Sally Fitzgerald. Farrar, 1979.

O’Donnell, Angela A. *Radical Ambivalence: Race in Flannery O’Connor*. Fordham UP, 2020.

Ownby, Ted. Introduction. By Ownby. *Manners and Southern History*, edited by Ownby. University Press of Mississippi, 2007, pp. vii–xiv.

Percy, William A. *Lanterns on the Levee: Recollections of a Planter's Son.* Knopf, 1941.
Ritterhouse, Jennifer. "Etiquette of Race Relations in the Jim Crow South." *The New Encyclopedia of Southern Culture: Race*, edited by Thomas C. Holt and Laurie B Green. Vol. 24. U of North Carolina Press, 2013, pp. 51–55.
———. *Growing Up Jim Crow: How Black and White Southern Children Learned Race*. U of North Carolina Chapel Hill, 2006.
Whitt, Margaret Earley. "1963, a Pivotal Year: Flannery O'Connor and the Civil Rights Movement." *The Flannery O'Connor Review,* vol. 3, 2005, pp. 59–72.
Wilson, Charles Reagan. "Manners." *The New Encyclopedia of Southern Culture: Race,* edited by Thomas C. Holt and Laurie B Green. Vol. 24. U of North Carolina Press, 2013, pp. 96–103.
利根川真紀「オコナーの "The Geranium" モチーフへの取り組み——南部娘にとってのホームと黒人」『言語と文化』13（2016）: pp. 23–38.